

渡嘉敷大綱引き

伝統の引き合い

沖縄では、夏や秋の村行事の一環として全域で綱引きを開催します。渡嘉敷もその例外ではありません。那覇で行われるものは、世界最大の綱引きとしてギネス世界記録に登録されています。

渡嘉敷大綱引きが実施されるのは、太陰暦の6月25日です（現在の7月もしくは8月）。集落が東と西に分かれて2チームで競います。言い伝えによれば、西が勝てば翌年は豊稔になり、東が勝てば豊漁になると言われています。集落の東西には、最近まで純粋な対抗意識がありました。島に最初に定住した一族の本家が西部に住み、その分家が東部に住んでいたためです。結果、競争が激化することもありました。

この綱引きのための綱は一般的なものよりかなり大きく、直径40～45cmあります。西チームを表す雌綱と東チームを表す雄綱の、それぞれ45mの2本の綱を組み合わせて使います。各綱の端には輪があり、雌綱の輪に雄綱を押し込んで、頭貫棒と呼ばれる太い木の棒で2本を締めます。各チームの人数はおよそ70人から80人です。綱は手で掴むには大き過ぎるため、参加者が引っ張るための細めの縄が取り付けられています。

綱は、通常の綱を巻き付けた稲縄3本か4本をより合わせて作られます。昔は村民の多くが稲作に携わり、神聖な綱に使われることを願って神社へ稲ワラを持ちこんでいました。ですが、現在は稲作農家が減っています。ワラの確保という課題はありますが、伝統を後世に引き継いでいくため、関係者による努力が続けられています。この米は綱引きの約1月前に刈り取られ、乾かした後に綱作りに使われます。

綱引き当日の朝、神社から各チームの旗頭が持ち出されます。東の旗頭には三叉に似た飾り、西の旗頭には三日月に似た飾りが付いています。綱引きが始まる前には各チームから2つの小グループが集まり、旗頭で模擬戦を行います。

綱引きは、村の東と西の境目にある村役場前で行われます。道に線が引かれ、それをおよそ3m 超えて綱を引いた方が勝者になります。

参加者の数合わせのため、旅行客がチームに振り分けられることもあります。運が良ければあなたも、古くからの沖縄の伝統行事へ参加する機会に恵まれるかもしれません。